

少雨に対する農作物被害防止対策

令和6(2024)年7月11日

芳賀農業振興事務所

今年の梅雨入りは平年より14日遅い6月21日でした。平年の梅雨入り日(6月7日)から7月7日までの雨量は、令和6年は173.7mm(平年の67.6%)、令和6年の梅雨入り日(6月21日)から7月7日までの雨量は102.3mm(平年の61.6%)と少なく、今後の週間天気予報においても雨量は少ない見通しであることから、以下の技術対策を確実に実施し、少雨に対する農作物被害の未然防止を図りましょう。

7月7日現在、鬼怒川上流4ダムの貯水率は平年比77%となっています。水事情に合わせて、効率的な利水に努めましょう。

I 普通作物

1 水稲

(1) 早植の水稲は出穂時期を迎えており、水が不足すると不稔や粒の奇形などが発生することから、地域で計画的な水利用(番水など)を行う。

2 大豆

(1) 開花前～莢伸長期にかけて土壌が過乾燥となった場合、花数減少や落莢、粒が小さくなることが懸念されるため、暗渠が施工してある水田では暗渠の排水弁を閉める。

(2) 1週間以上晴天が続き、頂小葉が立ち上がり反転して見えたら、畦間かん水を行う。なお、排水の悪いほ場で滞水が起きると湿害発生の危険があるので、畦間かん水は行わない。

(3) 畦間かん水は、気温の低い時間帯に短時間で行い、ほ場全体に行きわたったら(土壌の色が変わる程度)速やかに排水する。

(4) カメムシ類、ヨトウムシ類の発生に注意し、発生初期に登録のある農薬で防除する。

II 野菜

1 全般

(1) かん水設備のあるほ場は、生育や土壌の乾燥状態に応じたかん水を行う。かん水は、気温が低下している早朝を中心に実施する。

- (2) 育苗ほでは、遮光ネットなどで遮熱対策をするとともに、乾燥しないようにこまめなかん水に努める。
- (3) 収穫した野菜は、できるだけ涼しい所に置き（風が当たらない所）、鮮度を保つ。また、予冷庫があれば予冷庫に入れる。
- (4) アブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類が発生しやすいので、登録のある農薬で計画的に防除する。

2 いちご（育苗）

- (1) いちご苗への高温乾燥の影響を少なくするため、育苗ハウスの換気機能の強化（肩換気、循環扇、妻面の除去等）や遮光により、高温抑制を図る。
- (2) かん水は少量多回数で行い、かん水過多にならないよう注意する。また、夕方のかん水は夜間の多湿を招くので、早朝に行う。
- (3) 肥料の流亡による育苗後半の肥料切れに注意し、適宜、追肥を行う。
- (4) 炭疽病、ハダニ類、オオタバコガ、ハスモンヨトウの防除を行う。

3 夏秋なす

- (1) 花や果実に光が当たるよう整枝や葉かきを行い、果実品質の向上を図る。
- (2) 水分が不足すると追肥の効果（特に化成肥料を利用する場合）が遅れたり、つやなし果（ぼけ果）の発生を助長するため、降雨がなくほ場が乾燥している場合は、土壤の乾燥状態に応じ、積極的にかん水を行う。かん水設備のないほ場は、通路かん水を行う。かん水は、気温が低下している早朝を中心に実施する。

4 いら

- (1) 1年株（新植株）は生育を促すため積極的にかん水を行う。
- (2) 現在収穫している株は、高温・乾燥による生育遅延、葉先の枯れ等、収量・品質の低下が懸念されるため、乾燥状態に応じたかん水を行うとともに、遮光ネット等を使用し、気温上昇と土壤の過乾燥を抑える。

5 トマト

- (1) 草勢維持のため、不良果の摘果を行い、株の着果負担を軽くする。
- (2) 高温の影響で着果不良、着色不良等の発生のほか、草勢低下による収量・品質の低下が懸念されることから、乾燥に応じたかん水を行うとともに、遮光ネット等で気温の上昇を抑える。
- (3) 育苗時期にあたる場合は、高温により生育がやや軟弱となりやすい。適正管理（換気、遮光、こまめなかん水等）を行い、健苗育成を行う。
- (4) 定植時期にあたる場合は、定植後の植え傷み防止のため、遮光カーテン・遮光ネット等を使用し気温上昇を抑え、こまめなかん水を行う。

6 夏秋きゅうり

- (1) 高温の影響で着果不良、着色不良等の発生のほか、草勢低下による収量・品質の低下が懸念される。乾燥に応じたかん水を行うとともに、遮光ネット等で気温上昇を抑える。
- (2) 育苗時期にあたる場合は、高温により生育がやや軟弱となりやすい。適正管理（換気、遮光、こまめなかん水等）を行い、健苗育成を行う。
- (3) 定植時期にあたる場合は、定植後の植え傷み防止のため、遮光ネット・遮光カーテン等を使用し気温上昇を抑え、こまめなかん水を行う。

7 アスパラガス

- (1) こまめなかん水で畝全体を湿らせ、気温と地温の上昇を抑え、湿度の維持に努める。

Ⅲ 果 樹

1 全 般

- (1) かん水設備のある場合は、果実の日焼け等を防止するため適宜かん水する。最高気温 35℃を超える日が連続する場合は、少なくとも2日に1度はかん水を行う。
かん水設備のない場合は、スピードスプレーヤーを使ってかん水する。
- (2) 定植後1～2年の苗木や梨の「あきづき」の若木においては、根域が浅く高温・乾燥による葉焼け等の影響が出やすいため、こまめにかん水を行うとともに、株元にマルチをして土壤の乾燥を防ぐ。
- (3) 高温・乾燥によりハダニ類の発生が増えるため、園内の除草は控え天敵を温存するとともに、適期防除に努める。
- (4) 成熟期の果実は、果色の進み等を確認しながら適期収穫を行い、品質保持を図る。

Ⅳ 花 き

1 全 般

- (1) 施設栽培では、遮光資材や循環扇等を活用し、施設内の温湿度低下に努める。また、遮光資材の過度な利用は、作物の軟弱徒長を招くので注意する。
- (2) 露地栽培では、極端に乾燥した場合に早朝又は夕方に畝間かん水を行う。ただし、畝間に水が貯まらないように明きよなど排水対策を行う。
- (3) アブラムシ類、ヨトウムシ類、オオタバコガ、ハダニ類が発生しやすいので、登録のある農薬で計画的に防除する。

V 特用作物

1 こんにゃく

- (1) アブラムシ類の発生に注意し、登録のある農薬で防除する。
- (2) 白絹病の発生が確認されたら、直ちに登録のある殺菌剤で防除する。
- (3) 日焼け症等の高温対策のため固着性展着剤を使用する。気温が高い日中の薬剤散布は避ける。

VI 畜産

1 飼料作物

- (1) 永年草地において、放牧利用の場合は過放牧を避ける。また、採草利用の場合は、地際までの刈り取りや多回刈りを避け、草勢の維持に努める。

熱中症対策

高温に伴い熱中症リスクが極めて高まっていることから、安全に農作業を行うため、熱中症の危険性を認識し、未然防止を含めてその対処法について理解しておきましょう。

- 高温時の作業は避ける
- 単独作業は避ける
- 20分おきに休憩し、水分を補給する



熱中症には特徴的な症状がなく、暑い環境での体調不良は全て熱中症の可能性があり
ます。体調不良の症状があれば、ただちに作業を中断し、応急処置をとりましょう。

【応急処置】

- 涼しい環境へ避難する
- 服を緩めて風通りを良くする
- 水をかけたり、扇いだりして身体を冷やす
- 水分・塩分を補給する

